

設問 I

私たちは膨大な知識を自律的に学習するものを人工知能と呼ぶが、この人工知能という語のうち知能に関しては、脳の能力のようなものというイメージはすでに無効となった。一方、人工の意味は自明ではない。人工とは人間の技術の所産であり、技術は自然に対置されることが多いが、カントは自然を物理法則に従って作動する巨大な機械と捉えたために、彼にとって自然と人工、自然と技術という対立は存在せず、対立するのは意図や欲求を持って行動する人間の自由と意図を持たない自然である。さらに、技術は外部の目的を達成する手段とされがちだが、カントは、目的が自分自身の中にあり、自然の産物のようにみえる技術もあるという。それが芸術だが、科学技術にも遊びや芸術が含まれることを考えれば、A I も自然の所産、遊びの要素を持つ芸術活動と見ることができるといえる。

設問 II

≪解答例①≫

自然の語源が「おのずからしかり」であるように、人為と無関係に、はじめからそのようにあるものが自然であり、それに人為を加えることが技術である。この技術が外部の目的を持ってばテクニク、それ自身の美を目的としていけばアートだと、とりあえずは定義できそうだと。

だが、「わざ」という大和言葉を持ち、人間を自然の一部と見なしてきた日本の価値観からすれば、自然と技術を連続したものと考える見方のほうが私にはなじみやすい。たとえば、山から掘り出した土に触れる。その柔らかな感触に誘われて手でこねるうちに、土が形を成してくる。やがてそれが器になり、実際に供され、長い時間をかけて陶器を作る技術が発展したと考えてみれば、土という自然と手の感触という自然が技術を生んだと言えるのではないかと。カントと同様に自然と技術を単純な対立図式から解放することで、テクノロジーについても、自然から生まれる技術という地平が開かれると考える。

≪解答例②≫

現代では、埋め立てられたり海洋に投棄されたりするプラスチックが深刻な問題になっている。この問題解決に寄与すると考えられているのが生分解性プラスチックだ。生分解とは、微生物の働きによって物質が分子レベルまで分解され、最終的には二酸化炭素と水になって自然界へと循環していく性質であり、生分解性プラスチックは、自然の力を借り、自然に還っていく技術だと言える。

原始の頃、人間は泥や木、石、つるなどの自然物を用いて住居や食料を確保する技術を磨き、自然と共生していた。その後、人間は高度化した技術を用いて自然を改変・破壊するようになった。それにより人間生活は豊かになったが、一方で核兵器の脅威や環境問題など、人間自身が技術によって大きな害を被るようになった。

ここまで来て私たちは、利用するものとされるものという技術と自然の関係を転換し、自然の摂理に組み込まれた技術という原初の関係に回帰しはじめたのである。